

琉球大学学術リポジトリ

造林用苗畑の設備

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学農家政学部 公開日: 2011-06-20 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 山盛, 直 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/20487

苗 畑 の 設 備

数年この方国土緑化への意識が高まり、逐年造林面積の増えつつあることは、たいへん嬉ばしいことではありますが、今尚広大な要造林地をかかえた琉球では、これからますます造林の拡大に拍車がかけられることでありましょう。と同時に造林用苗木の供給も増加される必要があります、育苗のための苗畑の造成設置は重要な課題でありましょう。そこで苗畑の設備について問題になる点を述べて見ます。

1. 苗畑の選定と規模

苗畑の選定については、優良な苗木を生産し経営管理上の便宜を旨とせねばなりません。選定上重要な因子は土壌、水利、労働力、地形、環境等色々あって軽視出来ないものばかりですが、一概に云えば、土壌は肥沃で理学的に良好であり、水利に便で 極端な谷間や窪地は避け、5度程度の緩傾斜の排水良好な土地で強い気節風の吹き込まないような土地条件が理想と云えるでしょう。その外労力が容易に得られ交通が便で管理も容易な所が望ましい。苗畑の規模は将来の造林計画を基礎として算定されるべきですが、全育苗地に対する床地割合は播付床地10%、床替床地60%、休憩地その他30%が概略の基準になると思います。

2. 苗畑の区画整理

苗畑の区画整理は経営管理上大切なことで、それに当っては養苗地を優先し規模に対応して道路、水利施設、建物、防風林等を合理的に配置区分する必要があります

す。区画は正方形又は長方形とし境界線はなるべく直線状であることが望ましい。一区画の大きさは、風害の多い当地では防風垣の設置を考慮して2.5a-5a(75坪-150坪)程度で良いでしょう。道路は 全区域の中央部を通るように主道をそれになるべく直角に交るように副道を設け、必要によって歩道を取付ければ良い。主道は少くとも小型トラックの出入り可能なように巾員4mとし、副道はリヤカーの通れる程度で巾員2m、歩道は1m程度にすれば良いでしょう。主道副道に沿って水利、排水用の溝を設ける必要もあるでしょう。

建物は管理舎、堆肥舎等の施設が要るでしょうが、その位置は所要物質の運搬上、主道に接した、なるべく苗畑の中央部にまとめて建築することが望ましい。

3. 堆肥舎の整備

堆肥の効能については論ずるまでもなく、地力の維持増進上その生命をなすものであって、特に比較的腐植質の少い当地のような土地では先ず施用過多になる恐れはないでしょう。普通反当500-600貫程度の施用が基準になっています。熟成堆肥1立方尺当6貫仕りとした場合6尺×6尺×5尺堆積すれば、1坪当1.085貫生産となり、反当500貫施用とすれば、0.5坪の堆積面積となり、これに切返しその他の余地を加味して5割増を見込めば、1町当7.5坪の堆肥舎を必要とし、地力増強を目指した場合、1町当10坪の線が妥当な堆肥舎坪数となるでしょう。堆肥舎の設備と同時にきゅう肥生産を計るため、山羊或は牛馬等の家畜の飼育も是

非考慮すべきことでしょう。

4. 水利施設

当地では、夏季の強烈な陽光や冬季の乾燥した強風による旱害は想像以上のもので、水利施設は防風施設と同様に重要なことだと思えます。水利に便で地形や水量が許せば、導水路を設けて畦間に灌水する方法が一番簡便で経済的方法であります。自然灌漑のうまくいかない所では噴霧状撒水方式、即ちスプリンクラーによる灌水法を奨めます。自然水圧を利用出来る所では割合安経費でスプリンクラー施設が可能で、実験によると2分の1インチ3つ口を用いて12mの落差があれば直径12m、25mの落差があれば直径20mも灌水が出来ます。水利に恵まれない所であれば地下水をタービンポンプで送水する方法が良くなされています。

5. 防風施設

風害の多い当地では苗畑の周囲を防風林で囲むことは論を待たないが一般に苗畑の外側に樹高の比較的高い防風林帯を設け 必要に応じて中央に 副防風林帯を設けます。又各区画床地の周りにも必ず防風垣を設置して欲しいものです。防風効果は防風林帯と防風垣の適なかみ合せによって発揮されるものです。防風林帯或は防風垣を設ける場合、陽光庇陰による被害が起らぬよう工夫する必要があります。例えば道路の東乃至南側に設けるなどで、普通樹高の1倍-1.5倍の庇陰地が生じますし防風効果は樹高の風上で4倍、風下で20倍に及ぶと言われていますから区画面積の大きさに対応して防風林或は防風垣の高さを決めたら良いと思えます。

(山盛直)